

「第1回アジア美術館基本計画策定に関する有識者会議」議事概要

アジア美術館基本計画策定に関する有識者会議委員

西村 幸夫 (國學院大學観光まちづくり学部長・教授)
 建畠 哲 (京都芸術センター館長)
 菅谷 富夫 (大阪中之島美術館館長)
 松岡 恭子 (株)大央代表取締役社長、スピノラ・アーキテクト代表取締役)
 河野 まゆ子 (株)JTB総合研究所 執行役員 地域交流共創部長) (敬称略、順不同)

■ 基本的な方針(案)について

- ・ 目的を持って来訪した人が「学び・体験」をする以前に、まだ目的を持っていない人がアジア美術館に「出会う・気づく」というフェーズがあるため、その段階からの仕掛けづくりが必要。人流の多い都心にあるという警固公園の立地を生かして検討できると良い。
- ・ 「アジアの多様な美術や文化との出会い」を促進するため、地上部を含めた来訪者増加・賑わい創出に資する取組みを1つの柱として追加してはどうか。

■ 美術館活動について

- ・ アジア美術を通じて、批評性、社会的な問題を投げかける「問いかけ」は非常に大事なことだが、市場に発信するコミュニケーションワードとして、一般の来館者に対して理解しやすい表現にするなど工夫が必要。
- ・ 教育的機能は展示室の近くにあることが運用上望ましい。
- ・ 短期調査・長期滞在を問わず、作家などの来館に対応できるような研究スペースやサポートスタッフを置き、川端(現館)は情報研究のセンター的機能となることを重視してもらいたい。
- ・ アジアとの相互交流に関連し、アジア出身で海外在住の作家のような、複数の場所にアイデンティティを持つ作家についても情報収集してほしい。
- ・ アーティストの迎え入れだけでなく部分的にでも送り出し機能も備えた方がいいのでは。
- ・ 今後の収蔵品数や、既存建物の利活用などの収蔵スペースの構想を整理しておくべき。
- ・ 将来的な公立美術館の予算事情、及び企業が存続する社会的意義の双方の視点から、民間との連携、協働は極めて重要になる。

■ まちづくりの観点

- ・ アジアの特徴として、伝統は保ちつつ急激な都市化、人口増加などに対応してきたという歴史がある。その視点で見ると、今回、まちの変化によって都心の駐車場がアート空間に変わることは象徴的。その重要性やメッセージ性を考え、ここに美術館をつくるという意味やプロセスそのものを大事にするべき。
- ・ 天神ビッグバンなどの都市政策も含めて考えるべき。都市側の視点ももって、天神にアジア美術館が来ることによる地域の未来像も描けると良い。
- ・ 駐車場から美術館への転換は、福岡市の都心部の交通政策のストーリーにも合致する。美術館目線で整理されているので、より広い目線でアジアにおける日本や、福岡市の位置づけ、天神の警固公園という場所の意味、定義づけ、目指すべきビジョンを整理すべき。
- ・ 美術館の機能に関する内容や具体的な施策などをより深めた内向きの議論資料と、アジア美術館のビジョンや役割、福岡から世界に発信するメッセージなどを分かりやすく整理した外部向けのコミュニケーション資料を分けて整理したほうが分かりやすいかもしれない。
- ・ 警固公園は都市の中の生きた公園空間であり、地上での公園的機能を残すことが望まれる。それを念頭に地上部と地下部の接続を検討すべき。
- ・ 福岡市内に複数の美術館があり、また、天神ビッグバンにより民間施設内にアート作品が展示されるなど、街中でアートが楽しめるようになってきた。このような環境・潮流を踏まえた上でアジア美術館の位置づけや意義を検討することが必要。
- ・ 周辺の施設や企業がブランド価値の向上を感じて連携していけるよう、今、アジアの美術を取り上げるものの意味や価値、警固公園にアジア美術館をつくる意義を示すことが必要。

■ アイデア収集

- ・ 企業や教育研究機関などが対象と考えられるが、質問内容によって得られる情報の精度と粒度、密度がかなり変わるので、実施前に、実施タイミング・回数や目的をよく検討した方が良い。
- ・ 警固公園には地上部、地下部それぞれ都市公園法や面積上の制限があるため、民間事業者の意見を聞くと諸機能の解像度が上がるかもしれない。

以降は、アジア美術館の魅力向上の基本的な方針（案）をとりまとめるにあたり、検討内容を詳細に記載したもの。

1 アジア美術館の概要

名 称	福岡アジア美術館
設立年月日	1999年3月6日
所 在	福岡市博多区下川端町3番1号 博多リバレイン（展示室 7、8階）
構 造	鉄骨鉄筋コンクリート造
入館者数	427,800 人（2023年度実績）
沿 革	1992年（平成4年）6月 市長、アジア近代美術館の建設意向表明
	1999年（平成11年）3月 開館
	1999年（平成11年）3月 開館記念展「第1回福岡アジア美術トリエンナーレ1999」開催（～6月）
	2014年（平成26年）9月 「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ」開催（～11月）
	2024年（令和6年）3月 開館25周年を迎える



アジア美術館の「基本理念」

- ・アジアとの交流拠点、福岡
- ・世界に唯一、アジアの近現代美術の専門館
- ・創造・発信する交流の場
- ・「まち」の中のライブな美術館

2 アジア美術館の現状と課題

（1）アジア美術館の活動における強みと弱み（現状と課題）

強 み	弱 み
展 示 アジアの近現代美術作品を系統的に紹介する所蔵品展や、特別企画展等を開催 ・所蔵品展 : 年平均10回、小企画展 : 年平均1回 ・特別企画展 : 5回の福岡アジア美術トリエンナーレ（1999/2002/2005/2009/2014）	・2014年以降、最新のアジア現代美術を紹介する大型国際展を行っていない ・ <u>アジア美術は、文化的な背景等の知識も踏まえないければ、価値や魅力を感じる事が難しい作品が多く、それらを市民に十分に届け切れていない</u>
教育普及 ワークショップやボランティアによる作品解説など、アジア美術の理解を深める機会を設けている ・学校対応 年26回（2023年度実績） ・2024年から市内小学校向け対話型鑑賞プログラムを実施 ・アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ 年112回（2023年度実績）	・展示と連動した作品鑑賞のためのプログラムが不足している ・障がいのある方や高齢者向けのプログラムがない
調査研究 アジアの近現代美術に関する調査や研究を進め、関係機関・関係者とのネットワークを構築 ・現地調査で得た記録写真、資料、図書（約6万点）、情報の蓄積 ・アジア美術資料室ウェブサイトで情報（年表、文献、用語等）発信	・2014年以降、広範な現地調査が行えておらず、情報の更新や研究を深めることができていない
作品収集 アジアの近現代美術の作品を系統的に収集 ・多様なコレクション 約 5,700点 ・他館での「アジ美コレクション展」累積8回 →現代美術だけでなく、近代美術や大衆美術、民俗美術を含んだ幅広いコレクション	・近年、十分な作品購入ができておらず、最新の現代美術作品の収集ができていない
（レジデンス）美術交流 アジアからアーティストや研究者を招へいし、作品制作や講演会等の活動を通して地域の人々との美術交流を実施 ・開館以来、アーティスト114人、研究者27人 ・ワークショップ年平均13回、滞在制作の後に成果展を実施 →開館当初より交流事業を進め、その実績は他館でも類を見ない	・2018年以降、研究者を招へいしておらず、研究分野での交流が行えていない

(2) 施設の課題

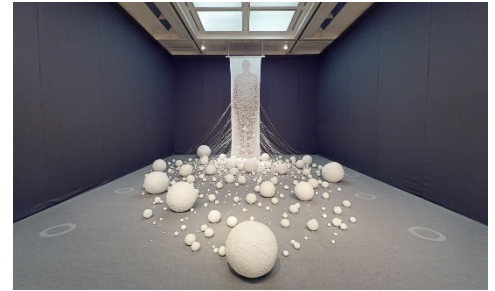
市民や観光客にとって、気軽に立ち寄る場所と認識されていない

現在、複合ビルの上層階に位置している現館は、立地は便利ではあるものの、「何かのついでに立ち寄る場所」とは言い難く、市民や観光客にとって、「わざわざ行かなければならない場所」という印象が強く、気軽な気持ちで日常的に訪れる施設とは認識されていない。その要因として、作品鑑賞以外の来館動機につながる過ごし方や価値の提供が不足していることが挙げられ、アジア美術との出会いの機会を作るため、集客・賑わいを生み出す機能の充実が必要である。

設備の老朽化

展示壁、天井、照明等は開館当初(約25年前)の設備で構成されており、老朽化が目立つ状況にある。設備の老朽化により館内の機能が低下しており、来館者にとって館内の雰囲気や体験の質が損なわれ、施設全体としての魅力が低下している。

<作品の大型化>



展示スペース不足

コレクションを十分に活用した魅力的な展示を行うには展示スペースが手狭になっている。インスタレーションや立体などの大型作品や、映像作品の増加に伴い、より広い展示面積が必要とされており、展示方法の多様化も進む中で、作品の魅力を引き出すための空間的余裕が求められている。

収蔵スペース不足

収蔵スペースもコレクションの増加に伴い不足しており、適切な保存・管理が困難となっている。開館当初は約1,000点であった作品数は2025年には約5,700点へと約5倍に増加しており、特に大型の彫刻作品や映像作品の増加が顕著であり、今後もさらなる対応が求められる状況にある。

作品点数の推移 : 1999年 約1,000点 → 2025年 約5,700点

主な作品の増加状況 : 絵画689点→1,434点 彫刻76点→230点 映像3点→89点

(3) 施設の拡充の必要性について

施設の課題解決に向け、展示機能や集客・賑わい機能等を拡充し、魅力向上を図るためには、現在の博多リバレイン7・8階の限られたスペースの再編成は困難であり、施設拡充を行う必要があると結論づけた。拡充先については、公有地を優先に、床面積規模を約7,500~9,000㎡程度、展示室の天井高さを約4~5mと想定し、それらが確保できること、都心部に位置する土地であることなどを前提条件として、複数の土地で評価比較をした結果、地上の公園を活かした象徴的な施設展開、周辺施設と連携した活動の展開が期待できることから、「警固公園地下」とした。

3 基本的な方針(案)のとりまとめに向けた検討

(1) 検討にあたり必要となる視点

都市施策

福岡市基本構想における「アジアの交流拠点都市・福岡」といった都市像や、彩りにあふれたアートのまちをめざす「Fukuoka Art Next(FaN)」、さらに「天神ビッグバン」等の緑化やアートを充実させ、憩いや彩りを感じられるまちをめざす都心部の官民連携のまちづくりなどへ貢献する必要がある。

外的環境

美術館を取り巻く変化として、近年の博物館法の改正等により、美術館には従来の資料の保存や展示といった機能に加え、地域の活力向上に寄与する役割や文化観光推進拠点としての役割が求められるようになった。また、アジア諸国が著しい経済成長を続け、国際的な存在感を増したことから、アジア美術を取り巻く状況も変化した。アジアのアーティストやキュレーターが国際的な芸術祭等で活躍する場面が増え、アジア美術の市場価値も高騰している。

国内外でアジア現代美術を取り扱う美術館も増え、教育普及や地域連携、戦略的な広報・マーケティングを行うことで、社会的ニーズに応えつつ集客面でも成功している。こうした他館の事例を参考にしつつ、現代美術にはおさまらない大衆美術や民俗美術、近代美術を含めた幅広いコレクションや継続的なレジデンスといった当館独自の強みをさらに磨くことが重要である。

4 魅力向上の基本的な方針（案）

これまでの検討を踏まえ、アジア美術館の魅力向上の基本的な方針（案）を示す。

（1）魅力向上の基本的な方針（案）

アジア美術と出会い、その問いかけから、自分と世界を見つめる美術館 交流を通じて、アジア美術の発展と福岡市の都市の魅力向上に貢献する美術館

福岡市は、古来、交流によって発展してきました。海を介してアジアの国々とつながり、多様性を受け入れながら都市として成長し続けてきた歴史があります。

福岡アジア美術館は、歴史的に形成されてきた福岡市のアイデンティティを体現するものとして、1999年に開館しました。アジアの近現代美術を系統的に収集し展示する、世界初、かつ唯一の美術館として、これまで5,000点以上の作品を収集し、様々な展覧会や美術交流を行ってきました。

開館から25年が経過し、福岡アジア美術館を取り巻く情勢にも大きな変化が生じています。アジア諸国は大きな発展をとげ、世界においてその存在感は増しており、アジアの躍動とともに、アジア美術もまた世界的に注目を集めています。さらに、AI時代を迎えた今、効率性や利便性が手軽に得られる中で、人生をいかに主体的に生きていくべきかという根源的な問いを見つめ直すものとして、文化芸術の重要性が増しています。

アジアの近現代美術は、それぞれの地域で発展してきた独自の社会や文化が、西洋や日本など外的な影響で大きく変化していき、伝統的価値観と近代的価値観がせめぎあう中で生まれ、そこに生きる人々と、人々が抱える葛藤や社会の矛盾を表現してきました。こうした作品が発する、大小さまざまな「問いかけ」を通じて、自分や世界を見つめ、新たな視点や気づき、他者への理解を共有する場として、福岡アジア美術館を発展させてまいります。

そこで、展示機能などを都心の核である天神の警固公園地下に展開し、福岡の新たな顔として、子どもから大人まで、より多くの市民や国内外の観光客が気軽に訪れ、アジア美術と出会い、楽しむ場となることを目指します。さらには、美術館の活動を通じて、アジアのアーティストと市民、美術関係者との交流を促進し、アーティストの成長とアジア美術の発展に一層貢献していきます。

加えて、福岡アジア美術館は、近隣の文化施設や企業とも連携し、地域の文化的魅力の向上に寄与し、アジア美術を通じて、多様性や国際的な視野を育み、市民の誇り（シビックプライド）を醸成します。持続可能なまちづくりに貢献するため、環境に配慮した施設整備を目指します。

福岡アジア美術館は、こうした取組みを通じて、福岡市が目指す「人と環境と都市活力が高い次元で調和したアジアのリーダー都市」の実現に貢献してまいります。

(2) これからのアジア美術館の方向性

魅力向上の基本的な方針(案)の実現に向けて、これからのアジア美術館の4つの方向性を掲げ、その方向性に沿った美術館活動の磨き上げを図る。

1. 出会う・気づく — アジア美術と気軽に会える場 —

子どもから大人まで、さまざまなきっかけで訪れる人々に対して、アジアの多様な美術や文化と出会う場を提供します。

都心の核である天神の公園に展開し、集客力のある施設として賑わいを創出し、より多くの人々にアジア美術の魅力に気づく機会を提供します。

また、地域の安全・安心にも貢献する場となることを目指します。

■ 実現に向けた具体的な取組み(案)

- ・展示室外におけるアートを感じる空間の創出
- ・市民や来街者が気軽に参加できる体験型イベントの充実 など

■ これからのアジア美術館が提供するもの

主なターゲット像

提供内容イメージ

市民・来街者

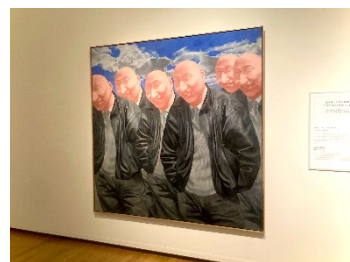
- ・自宅や職場、学校とは別に第三の居場所にもなる場
- ・買い物ついでに、アートに触れる施設
- ・仕事帰りや休憩時間に、アートに触れ、リフレッシュする場、新しい発想を得る場
- ・公園の延長として、偶然にアートに出会える場

観光客・
インバウンド

- ・世界唯一の美術館として、福岡の文化観光の目的地

地域コミュニティ

- ・日常の中で文化的な体験を得る施設
- ・地域の安全安心に貢献する施設



2. 楽しむ・見つめる — アジア美術を楽しみ、自分や世界を見つめる場 —

子どもから大人まで、アジアの美術作品が発する多様な問いかけを通じて、自分や世界を見つめ、広い視点や柔軟な発想を得ることができる場を創出します。

特に、未来を担う子どもたちにとっては、楽しみながらアジア美術を体験し、多文化や多様性について知る機会となる場を提供します。

■ 実現に向けた具体的な取組み(案)

- ・子ども向け対話型鑑賞の強化
- ・高齢者、また障がい者のためのプログラムの充実 など

■ これからのアジア美術館が提供するもの

主なターゲット像

提供内容イメージ

子ども・親子

- ・多文化や多様性を体験的に知る場
- ・子どもと過ごせるスペースで、アジアの文化に親しむ場

教育関係者

- ・新たな学びの手法や教材開発の実施の場

高齢者・
障がいのある方

- ・心の安らぎが得られ、社会参加ができる場



3. 伝える・拡げる －アジア美術の魅力を発信し、発展に貢献する場－

アジア美術と人々をつなぎ、作品が発する問いかけから生じた新たな視点や気づきを共有するため、魅力的な展示を行います。

アジア美術の歩みを物語る作品を幅広く収集し、調査・研究を推進することで、作品の価値を高め、魅力を発信し、アジア美術の発展に貢献していきます。

さらに、国内外の研究者や関連施設との連携を強化し、次世代の人材育成を図っていきます。周辺の施設や企業等とも連携を進め、地域の回遊性やブランド価値の向上にも貢献します。

■ 実現に向けた具体的な取組み(案)

- ・アジア美術に関する幅広く継続的な収集、調査、研究、展示
- ・アジアの学芸員や研究者の招へい、協働企画・研究の推進、国内外の美術館との広範な連携
- ・周辺の施設や企業と連携したイベント等の実施 など



■ これからのアジア美術館が提供するもの

主なターゲット像	提供内容イメージ
研究者 大学・研究機関	・アジア美術に関する貴重な研究資源が集まり、活用できる研究拠点
企業・NPO団体	・周辺の事業者 ⇒連携することで文化を発信できるパートナー ・協賛企業 ⇒社会貢献活動やブランド価値向上のパートナー ・観光・ホテル業界 ⇒集客につながる文化観光施設 ・NPO団体 ⇒アートを通じた社会貢献の場
美術関係者	・アジアのアーティストや表現と出会う場

4. 創る・挑む －アーティストの創造性を高め、チャレンジを支える場－

アジアのアーティストの作品の収集や展覧会の開催、アーティストが滞在して制作も行うアーティスト・イン・レジデンス等の充実を通じて、アーティストの成長を支援するとともに、新たな表現や世界への挑戦を支えます。

■ 実現に向けた具体的な取組み(案)

- ・アーティスト・イン・レジデンス事業の充実
- ・アジアのアーティストと福岡のアーティストや市民との交流を促進
- ・アジアのアーティストの個展やグループ展の企画・実施 など

■ これからのアジア美術館が提供するもの

主なターゲット像	提供内容イメージ
アジアの アーティスト	・アジアの美術や文化から、刺激や影響を受ける場 ・世界に向けた発信と交流の拠点

